

須磨や明石の浦伝ひ

——『源氏物語』と歌枕——

樹 下 文 隆

はじめに

謡曲《松風》の冒頭、下掛り系では次の「次第」が謡われる。

須磨や明石の浦伝ひ 須磨や明石の浦伝ひ 月もろともに出

でうよ

いうまでもなく、《松風》は『源氏物語』須磨巻を構想の核に据えた作品である。それについては、夙に、香西精氏の指摘がある。つまり、『古今和歌集』所収の在原行平の和歌「わくらはにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつつわぶと答へよ」と「立ちわかれいなばの山のみねに生ふるまつとし聞かば今帰り来ん」を骨組みの本説とし、『源氏物語』須磨巻を肉付けになる本説とする。ここで、『松風』では、光源氏を通して行平を造型しているのので、行平と光君とが二重に重なりあつて写し出される」とされたのである。それを受けて、伊藤正義氏は、

《松風》の叙景・抒情の詞章中に、所柄としての須磨のイメージを源氏寄合によって描写すること、《敦盛》《忠度》の場合

と同じ手法である。その上にさらに主題に密着した『源氏物語』の文章が重ねられているが、それは須磨の巻だけでなく、配流の地での寵愛の女性と、別離に際しての形見をめぐって、明石の上がヒントの役割を果しているように思われる。²⁾

と、光源氏と明石上の物語が行平を慕う松風・村雨の造型に大きく関わっていることを指摘された。上掛り系の謡本では古写本にも「次第」がなく、下掛り系にのみ付加された可能性も考えられる。しかし、『松風』が松風の恋慕を主題とする以上、そこに明石上の物語が想起されるのは必然と言え、仮に世阿弥による加筆でなかったとしても、本曲が『源氏物語』に寄り添っていることを極めて象徴的に示したのが、この「次第」の表現である。「浦伝ひ」という語も、明石到着後に光源氏が紫上に宛てた和歌「はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして」が、その典拠であることは否定できない。『源氏物語』須磨・明石巻の内容を十分に咀嚼した上での加筆であったと考えたい。

事件や人物・地名が、著名な古典によって具体的な物語を与え

られ、後の文学作品に繰り返し登場すること、知識（古典知）として定着する。その例証として、『萬葉集』以来の歌枕である「須磨」と「明石」が、『源氏物語』以前と以後で、その表現する世界に変化の見られること、特に和歌における『源氏物語』受容以後、「須磨」と「明石」の詠歌に明確な表現の差が見られなくなることを確認したい。摂津と播磨という異なる国の歌枕が『源氏物語』によって「浦伝ひ」と意識され、『平家物語』や謡曲で「須磨・明石」と連続した地名として当然のごとく表記されることに、芭蕉の「蝸牛角振り分けよ須磨明石」句を生み出す。その極めて暗示的な表現が〈松風〉の「次第」ではないだろうか。

一、『萬葉集』の須磨・明石

平安時代以降、歌枕は歌に詠まれる地名を指すようになり、特定の詞と結びつけて用いられる傾向がある。『萬葉集』でもその傾向がみてとれる。以下、和歌の引用は『萬葉集』と八代集は新日本古典文学大系、それ以外は断らない限り新編国歌大観に、『源氏物語』は新日本古典文学大系に拠った。それぞれの解釈についても新日本古典文学大系に拠った所が多い。

「須磨」は『萬葉集』に三例ある。

大網公人主の宴吟せし歌一首（卷三、四一三）

1 須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず

敏馬の浦に過りし時に、山部宿祢赤人の作りし歌一首短

歌を并せたり 反歌一首（卷六、九四七）

2 須磨の海人の塩焼き衣のなれなばか一日も君を忘れて思はむ
平群氏女郎の、越中守大伴宿祢家持に贈りし歌十二首【第
二】（卷十七、三九三）

3 須磨人の海辺常去らず焼く塩の辛き恋をも我はするかも

1は、塩焼き衣の織り目の「間遠」なことを中々逢えない仲に喩え、まだ恋人として馴染んでいない気持ちを歌っている。この歌は譬喩歌に配列されているが、『古今和歌集』七五八番歌（後掲二）や次の2を参照すれば、このように恋の歌と解釈することもできる。2は、恋人に馴れ親しんでしまうことを、須磨の海人が塩焼き衣を着馴れている様子に譬えている。3は、恋の辛きことを焼く塩の辛きことに譬えたもので、「志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも我はするかも」（三六五二番）と同趣の表現である。家持の恋人であろう平群氏女郎が、古歌にある筑紫の志賀の海人を、畿内でも遠方という認識で馴染みのある須磨の海人に置き換え、「須磨人」と表現したのであるか。以上、『萬葉集』では、須磨は海人の塩焼きが想起され、恋の心情を述べる際の比喩として用いられている。

「明石」を詠んだ歌は、『萬葉集』に九例（短歌七、長歌二）あり、旅の歌が多い。

柿本朝臣人麻呂の羈旅の歌八首【第六、七】（卷三、

二五四、二五五）

4 灯火の明石大門に入らむ日や漕ぎ別れなむ家のあたり見ず

5 天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

門部王の、難波に在りて、漁父の灯火を見て作りし歌一首（同、三二六）

6 見渡せば明石の浦にともす火のほにそ出でぬる妹に恋ふらく

羈旅の歌一首（同、三八八）

7 わたつみは くすしきものか 淡路島 中に立て置きて 白

波を 伊予に廻ほし 居待月 明石の門ゆは 夕されば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干れしむ 潮さゐの（以下略）

山部宿祢赤人の作りし歌一首短歌を并せたり

反歌三首〔第三〕（卷六、九四一）

8 明石潟潮干の道を明日よりは下笑ましけむ家近づけば

羈旅にして作りし歌九十首〔第四十七〕（卷七、

一二〇七）

9 粟島に漕ぎ渡らむと思へども明石の門波いまだ騒けり

〔第六十九〕（同、一二二九）

10 わが舟は明石の水門に漕ぎ泊てむ沖辺な離りさ夜ふけにけり

所に当たりて誦詠せし古歌十首〔第七〕（卷

十五、三六〇八）

11 天離る鄙の長道を恋ひ来れば明石の門より家のあたり見ゆ

物に属けて思ひを発せし歌一首（同、三六二七）

12 （前略）我妹子に 淡路の島は 夕されば 雲居隠りぬさ

夜ふけて 行くへを知らに 我が心 明石の浦に 船泊めて

浮き寝をしつつ（後略）

4は、畿内から明石海峡を通過し、見えなくなった故郷へ別れを告げる歌、5と11は、逆に西国から帰郷して明石海峡を越え、故郷の山々が見えることを歌う。7は、後の反歌「島伝ひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さはに鳴く」から、明石海峡で旅の夜を過ぐす時の望郷の歌と思われる。8は陸路で明石まで来て故郷に近づいた嬉しさを歌う。9は畿内から粟島に船出しようとして明石海峡の潮流の激しさを歌う。10と12は夜になって明石の浦で潮待ちする様子を歌う。6は難波から海を見渡すと暗闇に明石浦の漁り火が見えるように、恋が人目に付くようになったと歌う。6を除けば、すべて明石海峡を渡る旅の歌であることに注目したい。つまり、明石は畿内と西国の境界として意識され、特に夜の船旅での激しい潮流によって引き起こされる不安と、海から見える故郷の山々に触発された郷愁を歌う場所であった。また、4、6、7、12に見るように、「明石」に「明し」を掛ける例の多いこと、特に7のように「月明し」の表現がすぐに見られることが指摘できよう。

二、『千載和歌集』以前の須磨・明石

『萬葉集』での須磨の詠まれ方は、『古今和歌集』にも受け継がれている。「須磨」は三首詠まれている。

題知らず よみ人しらず（卷十四恋歌四、七〇八）

1 須磨のあまの塩やくけぶり風をいたみ思はぬ方にたなびきに

けり

(巻十五恋歌五、七五八)

2 須磨のあまの塩やき衣おさをあらみまどをにあれやきみが来
まさぬ

田村の御時に、事に当りて、津国の須磨と言ふ所に籠り
侍けるに、宮のうちに侍ける人に、遣はしける 在原行

平朝臣(巻十八雑歌下、九六二)

3 わくらばに問人あらば須磨の浦にもしほたれつ、侘ぶとこた
へよ

1は、仮名序でたとへ歌の例歌として取り上げられている。『伊
勢物語』一一二段では「昔、男、懇ろに言ひ契りける女の、異様
なりにければ」とあり、思いがけない相手になびいたと嘆くのは、
男である。2は『萬葉集』(前掲一)の類歌である。『源氏物語』
に引用される行平の詠歌3も含め、須磨の地は、海人の塩焼きや
塩焼き衣を用いて煙、馴れ、間遠、潮垂れなどの詞を導く手段と
して用いられている。『拾遺和歌集』では、

天曆御屏風に(巻十七雑秋、一〇九六)

4 藻塩焼く煙に馴る、須磨の海人は秋立霧も分かずやあるらんと、
「塩焼」「煙」「馴れ」を用いる点はこれまでと同様だが、煙
に「秋霧」を添えていることに着目したい。屏風歌なので、『源
氏物語』須磨巻の趣向に影響を与えた可能性もあろう。『後拾遺
和歌集』は次の三首である。

筑紫へ下りけるに、道に須磨の浦にてよみ侍ける 大中

臣能宣朝臣(巻九羈旅、五二〇)

5 須磨の浦を今日すぎゆくと来し方へ返る波にやことをつてま
し

西宮前左大臣(巻十一恋一、六五二)

6 須磨の海人の浦こぐ舟のあともなく見ぬ人恋ふるわれやなに
なり

須磨の浦をよみ侍ける 藤原経衡(巻十八雑四、

一〇五四)

7 立ちのぼる藻塩のけぶり絶えせねば空にもしるき須磨の浦か
な

5は波に故郷への言伝を願う趣向の旅の歌で、須磨の境界性が意
識されている歌である。次に配置されている

筑紫にまかり下りけるに塩焼くを見てよめる 大式高遠

風吹けば藻塩の煙うちなびき我も思はぬかたにこそたて
も、1の表現を踏まえていることから、須磨での詠歌としてよか
ろう。この後に明石の歌が続くことも興味深い。6は海人の漕ぐ
舟が跡をとどめないことを、あともなき恋へと続けている。須磨
に海人の舟を登場させた点、新しい詠み方と言えよう。7は須磨
の浦が「藻塩焼く煙」の名所として定着したことを示しているよう。
『金葉和歌集』には次の三首が載る。

関路千鳥といへることをよめる 源兼昌(巻四冬、
二七〇)

8 淡路島かよふぢどりのなくこゑにいく夜ねざめぬ須磨の関守

太宰大貳長実(巻七恋部上、三五七)

9 思ひやれ須磨のうらみて寝たる夜のかたしく袖にかゝる涙を

恋の心をよめる 皇后宮権大夫師時(補遺歌、六九四)

10 人しれぬ恋をしすまの浦人は泣しはたれて過す也けり

8では「千鳥」「関」「ねざめぬ」、9では「恨み」「寝たる夜」「袖にかかる涙」、10では「泣しはたれ」など、いずれも行平詠及び『源氏物語』と通じる詠みぶりと言えよう。特に、8は光源氏の詠歌「友千鳥もろ声に鳴くあか月はひとり寝さめの床もたのもし」(源氏・須磨)を、9は六条御息所の詠歌「うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ藻塩たるてふ須磨の浦にて」(同)を想起することができるのではないだろうか。『詞花和歌集』の二首、

郁芳門院の菖蒲の根合による 中納言通俊(巻二夏、六八)

11 藻塩やく須磨の浦人うちたえていとひやすらんさみだれの空

堀河院御時、上のをのこどもを御前に召して歌よませさせ給けるによる 源俊頼朝臣(巻九雑上、二七三)

12 須磨の浦にやく塩釜のけぶりこそ春にしられぬかすみなりけれ

は、11で菖蒲の根合に因んで「絶え」「糸」「五月雨」が使用され、12では、4の「秋霧」に対して、煙を「春霞」に見立てる。これで、四季すべての詠須磨和歌が揃ったことになる。『萬葉集』以来の「海人の塩焼きの煙」の詠歌の伝統を受けつつ、3の行平詠で恋から解放され、『拾遺和歌集』以降に新たな素材が開拓された。『源氏

物語』で一年を通した須磨が描かれることによって、詠須磨和歌の多様性が生まれたと見ることができ。

一方、『古今和歌集』で「明石」を詠んだ歌は一首のみである。

13 ほのくとかあしの浦の朝ぎりに鳥がくれ行舟をしぞ思
(巻九羈旅歌、四〇九)

この歌は、ある人の曰く、柿本人麿が歌なり。

人麻呂伝承歌だが、仮名序にも人麻呂作として登場し、人麻呂の代表作、和歌史上の最高傑作として尊ばれていく。羈旅歌であり、「明石」に「明し」を掛けるのは、『萬葉集』(前掲一4、6、7)などと同趣であろう。しかし、『萬葉集』には「明石」に夜が明ける意味を持たせた歌はなかった。「明石」に「夜明け」を掛ける趣向は、『拾遺和歌集』でより洗練されていく。

明石の浦のほとりを舟に乗りてまかりけるに 源為憲
(巻八雑上、四六四)

14 世と共に明石の浦の松原は浪をのみこそよると知るらめ
よみ人知らず(同巻十四恋四、八五五)

15 我が宿は播磨渚にもあらなくにあかしも果てて人の行くらん
14は「世」に「夜」を掛けて「明石」を導き、15は恋の歌として「明かしも果てで」と「明石」で夜明けを想起させている。『後拾遺和歌集』の四首はすべて羈旅部である。

書写の聖に会ひに、播磨の国におはしまして、明石といふ所の月を御覧じて 花山院御製(巻九羈旅、五二二)

16 月影は旅の空とてかはらねどなを都のみ恋しきやなぞ

播磨の明石といふ所に、潮湯浴みにまかりて、月の明かりける夜、中宮の大ば所にたてまつり侍りける 中納言
資綱（同、五二三）

17 おほかかな都の空やいかならむ今宵あかしの月を見るにも

返し 絵式部（五二四）

18 ながむらん明石の浦のけしきにて都の月は空に知らなん

筑紫に下り侍りけるに、明石といふ所にてよみ侍ける

帥前内大臣（同、五二九）

19 物思ふ心の闇し暗ければあかしの浦もかひなかりけり

16、17、18は月を詠んでおり、明石が月の名所として意識されてきたことがわかる。また、それが輮旅歌である点、故郷の都を思う心情が込められていることも注目されよう。16は性空上人のものとへ行幸した時の歌で、月は和泉式部の「暗より暗道にぞ入ぬべき遙に照せ山の葉の月」（『拾遺和歌集』）を想起させるが、同時に明石での旅情を歌う点、『萬葉集』と共通する意識もあつたと思われる。それに対し17と18は彼の地と都との贈答歌である点、『源氏物語』と通底するものがある。19は、筑紫に流された伊周が明石の地で詠んだ歌で、菅原道真の「駅長莫驚時変改 一栄一落是春秋」（『菅家後集』『大鏡』）が意識されている。『金葉和歌集』には三首載る。

鳥羽殿にて、旅宿月といふ事をよめる 春宮大夫公実
（『金葉和歌集』卷三秋部、一七九）

20 われこそは明石のせとに旅寝せめおなじ水にも宿る月かな

水上月をよめる 藤原実光朝臣（同、二〇八）

21 月影のさすにまかせて行く舟は明石の浦やとまりなるらん

月のあかゝりける頃、明石にまかりて月を見てのほりたちけるに、都の人々月はいかゞなどたづねけるを聞きてよめる 平忠盛朝臣（同、二一六）

22 ありあけの月も明石の浦風に波ばかりこそよると見えしか

すべて旅の歌と理解することもできるが、秋の部であることに注目したい。明石が名月を味わう地として周知された結果であろう。特に22は西国から帰郷の折の詠歌として『萬葉集』から続く伝統を引き継ぎつつ、都人が「明石の月」を尋ねるという趣向は、『源氏物語』を髣髴させるものである。

『詞花和歌集』には、次の和歌が載る。

帥前内大臣明石に侍ける時、恋ひ悲しみて病になりてよめる 高内侍（卷九雑上、三四〇）

23 夜の鶴みやこのうちにはなたれて子を恋ひつゝもなきあかすかな

19の伊周詠と同じ時期で、「泣きあかす」に明石を響かせた点が珍しいと言えよう。

須磨と明石が関連づけられた最初の和歌と思われるのが、『拾遺和歌集』卷第八雑上 四七七（『人丸集』二二五）である。

24 白浪はたてど衣にかきならず明石も須磨もをのがうらく言語遊戯の和歌で、布は裁ち縫えば表と裏が重なるが波が立つても私の衣に重ならない。なぜなら明石も須磨もそれぞれの浦で

も私の衣に重ならない。なぜなら明石も須磨もそれぞれの浦で

あつて衣の表ではないという。平安初期には明石と須磨が浦の名所として確立していたことがうかがえる。

三、『千載和歌集』時代の須磨・明石

『千載和歌集』に詠須磨和歌は九首ある。中でも、

千鳥をよめる 皇太后宮大夫俊成（卷六冬歌、四二五）

1 須磨の関ありあけの空になく千鳥かたぶく月はなれもかなし
や

は、『金葉和歌集』（前掲二八）及び光源氏の「友千鳥」歌を踏まえたことが明らかである。そのほかにも、

法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍りける時、関路月といへる心を 中納言師俊（卷八轡旅歌、四九九）

2 播磨路や須磨の関屋の板びさし月もれとてやまばらなるらむ
堀川院御時百首歌たてまつりける時、旅の歌とてよめる

中納言国信（同、五〇一）

3 波のうゑに有明の月を見ましやは須磨の関屋にやどらざりせば

4 関路暁月といへる心をよめる 法眼兼寛（同、五三五）
いつもかく有明の月のあけがたはものやかなしき須磨の関守
百首歌たてまつりける時、月の歌とてよめる 前参議親

隆（卷十六雑歌上、九八九）

5 播磨渇須磨の月よめ空さへて絵島が崎に雪ふりにけり

があり、「須磨の月」が勅撰集に初めて登場し、しかも五首も詠まれている。『千載和歌集』以外でも、

月はたびのなかのともといふ題を（『六条修理大夫集』八二）

6 ふなでしてすまのうらわによもすがら月のひかりのさすをこそまで

（『田多民治集』二二二）

7 浪のうへにうかべる月をたまがてるうらかとや思ふすまの海士人

人のこひしかば海 路月（『重家集』二八二）

8 はりまがたすまのうらわにこぎくれどここもあかしと見ゆる月かけ

毎昼遇恋（『教長集』六八〇）

9 すまのうらの月のでしほに袖ぬらしひるまひるまをまつぞわりなき

と、同時代で「須磨の月」を詠む歌人が多出している。特に8は、月の名所として須磨と明石の近さを話題にする点が注目される。このように、須磨の月を詠む歌人が増えたことにより、『千載和歌集』に至って月の名所須磨が認知されたといえよう。

『千載和歌集』の詠明石歌は俊恵法師の二首だけで、そのうち、
海辺月といへる心をよめる 俊恵法師（卷四秋歌上、二九一）

10 ながめやる心のはてぞなかりける明石のをきにすめる月かけ

は、秋の月を詠んでいる。このように、「須磨」と「明石」の二つの歌枕は、月の名所という共通の要素を持つことになった。いうまでもなく、それは『源氏物語』がもたらしたものに他ならない。『新古今和歌集』では、8と同様、「須磨」と「明石」が月を詠む場として、変換可能であることを思わせる和歌が登場する。

定家朝臣（卷十六雑歌上、一五五七）

11 藻塩くむ袖の月かげをのづからよそに明かさぬ須磨の浦人は、「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしもたれならなくに」（源氏・若菜下）を踏まえつつも、月を合わせ詠むが、続く一五五八歌では、

藤原秀能

12 明石渇色なき人の袖を見よすゝろに月もやどる物かはと、明石の月に話題を移している。ともに「袖の月」を詠む同質の詠歌と言えよう。また、

明石浦をよめる 俊頼朝臣（卷十七雑歌中、一六〇二）

13 海人小舟とま吹きかへす浦風にひとりあかしの月をこそ見れでは、「吹きかへす」「ひとり」など、明石浦を題としながら須磨巻を想起させる言葉が連ねられている。

次に、〈松風〉「次第」で用いられる表現「浦伝ひ」を見てみよう。永承四年（一〇四九）内裏歌合選外歌とされる次の和歌が初例と目される。

相模（『後拾遺和歌集』卷六冬、三八九）

14 難波潟朝みつ潮にたつ千鳥浦づたひする声きこゆなり

また、『伊勢大輔集』（一五八番）には、

かうしむのよ、まぜくだものをひとびとよみしに、あまぐりを

ますらをのあまくりかへしはるのひにわかめかるとやうらづひする

のように、海人が浦伝いしながら和布を刈するという表現を詠み込んだ歌が載っている。『源氏物語』との先後関係はわからないが、両歌とも物語を踏まえた要素は見当たらない。しかし、『千載和歌集』の次の歌は、『源氏物語』が踏まえられているようだ。

嘉応二年法住寺殿の殿上歌合に、閑路落葉といへる心をよみ侍ける 右のおはいまうち君（卷五秋歌下、三六一）

三六一

15 山をろしに浦づたひするもみち哉いかゞはすべき須磨の閑守道因法師（卷六冬、四二六）

16 岩こゆるあらいそ波にたつ千鳥心ならでや浦づたふらむ 俊成（卷八羈旅歌、五一五）

17 浦づたふ磯の苫屋の梶枕聞きもならはぬ波の音かな

16は1の次に配され、「千鳥」を読み込んでいるので『源氏物語』を踏まえていると思われる。物語では、源氏が「友千鳥」歌を詠んだ次の場面で、明石の浦のことが「たゞはひ渡るほど」として登場する。光源氏を千鳥に喩えた歌であろうか。17は、『源氏物語』須磨巻の「波たゞこゝもとに立ちくる心ちして、涙落つともおほえぬに枕浮くばかり」や「雁の連ねて鳴く声、梶のをとにまがへ

るを」を踏まえていることは明らかであろう。15の作者徳大寺実定は、「はかなくも来む世をかけて契かなふた、び同じ身とはならじを」(巻十五恋歌五、九二)という歌も詠んでいる。これが『源氏物語』夕顔巻の「優婆塞が行ふ道をしるべにて来む世も深き契たがふな」「先の世の契知らる、身のうさに行く末かねて頼みがたさよ」を踏まえていると思われることから、こゝも須磨の関を詠む点で物語を踏まえたと考えたい。

以上に見てきたように、勅撰和歌集では『千載和歌集』において、「須磨・明石の月」と「浦伝ひ」が『源氏物語』を介した歌語として定着したのである。

四、須磨や明石の浦伝ひ

道長との権力闘争に敗れた帥殿(藤原伊周)と弟の中納言(隆家)は、謀叛の罪で播磨と但馬に流された。『栄花物語』巻第五「浦の別」では、明石に着いた伊周が、隆家と所を違えて流されたことを嘆く次のような記事が載る。

帥殿は播磨におはすとて、「こは明石となん申」と云ふを
聞し召して、

物思ふ心の闇し暗ければ明石の浦もかひなかりけり
「いでや、物のおほゆるにや」と、我が御心にも憎くおぼさ
るべし。「中納言異方へおはすらむを、などか、同じ方にだ
にあらましかば、何事もよからまし」と、あやになる世を

心憂くおぼされて、「白浪はたてど衣に重ならず明石も須磨
もをのがうら／＼」といふ古歌をかへさせ給へるなるべし
かたがたに別るる身にも似たるかな明石も須磨もをのが
浦々
とぞ思されける。

国を隔てて流されたことを『拾遺和歌集』(前掲二24)に拠って「明石も須磨もをのが浦浦」と歌っており、ここに「源氏物語」の影響を受けない場合、明石と須磨は近接しつつも越えることのできない隔たりをもつてイメージされていたことが読み取れよう。『源氏物語』でも、「はひ渡るほど」の距離でありながら、「あやしき風」の力がなければ越ええぬ境界のように描かれている。

中世和歌では、この境界性は意識されることが少なくなり、

月百首歌に 前大納言忠良(『続古今和歌集』巻四秋歌上、
三九四)

いかなればすまのせきやをもるつきのあかしのうらになをと
どむらん

住吉社によみてたてまつりける百首歌の中に 皇太后宮
大夫俊成(『新後撰和歌集』巻六冬歌、四七七)

あかし方月のでしほやみちぬらんすまの波路に千鳥とわたる
うら 弁入道光俊(『新撰和歌六帖』三、一一五五)
すまあかし浦のみわたしちかけれどあゆみくるしきたかすな
ごかな

かものうたあはせに、かすみを(『有房集』、九)

みわたせばあかしもすまもかすみしていづれなるらんおのがうらうら

などのように、須磨と明石の近接性が謡われている。特に、「須磨・明石」と「浦伝ひ」が詠まれている歌に、

海路五首のうち（『秋篠月清集』二夜百首、一九六）

あかしよりうらづたひゆくともなれやすまにもおなじ月を見るかな

冬のうち（同・院初度百首、七六二）

あかしがたすまもひとつにそらさえて月にちどりもうらづたふなり

百首歌中に霞隔浦といふ事を（『寂蓮法師集』、二二）

へだてつるあかしのとまでこぎつれど霞はすまに浦づたひけり

宰相入道教長の家歌合に寒夜千鳥（同、四五）

行かへり浦づたひするさよ千鳥明石もすまもかぜや寒けき

秋 守覚法親王（『正治初度百首』、三四八）

おも影にすまもあかしもさそひきて心ぞ月にうらづたひける

十四番左 忠良卿『卿相待臣歌合』、二二七

浦づたふ月はあかしの空晴れてなみに秋ふくすまの塩かぜ

立春の心を（『経正集』、一）

けさみればすまもあかしもかすめるはうらづたひしてはるやきぬらん

搦衣関風 文明十二（私家集大成6 大阪市立大学図書館

森文庫本『後土御門御詠草』、二〇八）

打音はあかしにすまのあま衣うらつたひにや風さそふらん
などがあり、「須磨・明石」の歌枕に「浦伝ひ」は欠かせない要素の一つとなっている。

このような中世和歌の表現を受けて、「須磨・明石」が同質の歌枕として併称される現象が「平家物語」などに見て取れる。巻五「月見」で、福原遷都後の月見の名所を列記する冒頭には、

やうやう秋もなかばになりゆけば、福原の新都にまします人々、名所の月を見んとて、或いは源氏の大將の昔の跡をしのびつつ、須磨より明石の浦づたひ、淡路の瀬戸を押し渡り、絵島が磯の月を見る。

と、福原に近い月の名所として須磨・明石・絵島が併記される。特に、「須磨より明石の浦づたひ」という表現が、成句となっていることを示している。巻九「落足」で、一ノ谷合戦に敗れた平家の落人の様子を描写する場面でも、

或いは須磨より明石の浦伝ひ、泊り定めぬ梶枕、片敷く袖もしをれつつ、臍にかすむ春の月、心を碎かぬ人ぞなき。或いは淡路の瀬戸を漕ぎ通り、絵島が磯に漂へば、波路かすかに鳴き渡り、友迷はせる小夜千鳥、これも我が身のたぐひかなと、「月見」とほぼ同様の歌枕の列記がなされ、『源氏物語』を意識した「友迷はせる小夜千鳥」が導き出されている。中世において、「須磨・明石」は一体感をもって描写される存在だったと言える。また、謡曲中の「須磨・明石」の描写を羅列してみると、

〈須磨源氏〉「クセ」年二十五と申せしに、津の国須磨の浦、海士人の歎きを身に積みて、次の春、播磨の明石の浦伝ひ、問はず語りの夢をさへ、現に語る人もなし

〈住吉詣〉「二セイ」「上ヶ歌」明石渚、月待つ方に行く舟の、波静かなる浦伝ひ、舟出せし、後ろの山の山嵐、後ろの山の山嵐、関吹き越えて行く程に、須磨の浦わもいつしかに、跡の名残もおしてるや

〈源氏供養〉「クセ」ただすべからくは、生死流浪の須磨の浦を出でて、四智円明の明石の浦に滯標、いつまでもありなん

〈艤〉「クセ」前は海後ろは山、左は須磨右は明石の、とよりかくより行きかふ舟の、共寝の千鳥も声々なり

〈俊成忠度〉「クセ」さても我れ須磨の浦に、旅寝して眺めやる、明石の浦の朝霧と、詠みしも思ひ知られたり

〈絃上〉「サシ」面白や浦に入り日は海上に浮かみ、須磨や明石の浦の様、塩焼く海士の心にも、さも面白う候ふなり

〈竹雪〉「歌」世を鶯の声立てて、煙は竹を白雪の、明石と言へば須磨の浦の、海士の焼くなる塩やらん

〈安宅〉「クセ」ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の中に、海少しある夕波の、立ち来る音や須磨明石の、とかく三年の程もなく、敵を亡ぼしなびく世の

と、『源氏物語』に由来する謡曲で「須磨・明石」「浦伝ひ」が用いられるのは当然のことながら、須磨を舞台とする作品でなくと

も、〈安宅〉のように登場人物の戦歴に関わる歌枕として掲出され、〈竹雪〉のように「雪明かり」から「煙」を導く文飾として用いられるほどであった。このような用いられ方が広く普及した結果、『猿蓑』（卷二）の

此境「はひわたるほど」、いへるもこゝの事にや
かたつぶり角ふりわけよ須磨明石 芭蕉
などが生み出されていったのだろう。

五、下掛かり系〈松風〉の二つの「次第」

冒頭で述べたように、下掛り系謡本は古写本から現行本まで、開口一番に「須磨や明石の浦伝ひ 須磨や明石の浦伝ひ 月もろとにも出でうよ」の「次第」を有している。この表現の背景として、『源氏物語』須磨・明石巻がもたらした、須磨と明石の歌枕を一括りのものと捉え、その関係を「浦伝ひ」で表現し、両者に共通する情景として「月」を詠む和歌世界での蓄積を指摘することができた。下掛り系謡本は、他にもシテ登場「一セイ」の後に、次のような「次第」を記している。

秋に馴れたる須磨人の 秋に馴れたる須磨人の 月の夜潮を
汲まうよ

後に芭蕉が『笈の小文』で

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや。此浦の実は秋をむねとする
なるべし。かなしささびしさいはむかたなく、秋なりせば、
いさ、か心のはしをもいひ出べき物と思ふぞ、我心匠の拙
なきをしらぬに似たり。淡路嶋手にとるやうに見えて、すま・
あかしの海右左にわかる。呉楚東南の詠もかゝる所にや。物
しれる人の見侍らば、さまぐの境にもおもひなぞらふるべ
し。又後の方に山を隔て、田井の畑といふ所、松風・村雨ふ
るさと、いへり。(宝永六年刊本)

と「夏の月」を詠みながら秋に言及し、松風・村雨に思いをいた
したのも、〈松風〉が念頭に置かれていることは疑いない。もち
ろん、このシテ「次第」がなくとも謡曲から芭蕉の感慨は導き出
されるであろう。また「次第」の表現自体が、第四、五段での潮
汲みの業と須磨の浦の秋の月を詠嘆する場面から容易に生み出さ
れるもので、世阿弥以後に付加されたものであるとするのが穏当
であろう。しかし、【真ノ一声】で登場し、橋掛りで「二セイ」
を謡って舞台に入った後「次第」を謡うという構成は、世阿弥作
〈当麻〉に近い。また、「須磨人」の語は、前述の萬葉歌(一三)
が初出と思われるが、須磨到着後に光源氏が藤壺に贈った和歌「松
島のあまの苦屋もいかならむ須磨の浦人しほたる、ころ」や、六
条御息所の和歌「うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれ藻塩たるて
ふ須磨の浦にて」、彼女に贈った源氏の和歌のうち「伊勢人の浪
のうへこぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを」などが想起
される。中世和歌でも、『草根集』に「夜衾」の題(六二二三番)

すま人や浪のよる床さえし海の衾は身にかかれども
伏見宮貞常親王に「栽花」の題で(私家集大成6『後大通院殿御
詠』、同解題七二〇番)

すま人やいまもうへの、桜花むかしのかけは若木ならしを
などがあり、「須磨人」は『源氏物語』を踏まえて案出された中
世歌語と認めてよからう。もつとも、〈松風〉の場合は、世阿弥
作〈敦盛「クセ」〉の「海人の苦屋に共寝して 須磨人にのみ磯
馴れ松の」から、後人が取った可能性もあろう。

『源氏物語』以前の須磨の秋の詠として注目した『拾遺和歌集』
(前掲二四)の例もあり、「馴れ・須磨・秋」を取り合わせた和歌
は多いが、『新後撰和歌集』巻五秋歌下の三六一、三六二番歌、

弘長元年、百首歌たてまつりける時、月 前大納言為氏
しほ風のなみかけ衣秋をへて月になれたるすまのうら人

題しらず 津守国冬

もしほやく煙なたてそ須磨のあまのぬるる袖にも月はみるら
ん

などを見れば、〈松風〉シテ「次第」の表現も中世和歌の世界と
つながるものであったことは疑いなかろう。

注

- (1) 香西精「作者と本説 松風」(『観世』昭和三十五年九月号。『能
謡新考―世阿弥に照らす―』檜書店、一九七二年、に再録。)
- (2) 新潮日本古典集成『謡曲集 下』(一九八八年) 解題。